

フランス語の隠れたしくみ

15. 感覚・感情の表現

東郷雄二

今月はいきなり問題から始めよう。フランス語で「背中がかゆい」は何と云うか。これはけっこう難しい問題で、フランス語をかなり勉強した人でもすぐには答えられないことがある。「かゆがらせる」*démanger* という動詞を使って、*Le dos me démange.* というのがふつうである。今回はこの例を出発点として、文法で取り上げられることの少ない日本語とフランス語のしくみのちがいを考えてみたい。

分けられないものをいかに分けるか

「痛い」「かゆい」などの感覚や、「うれしい」「悲しい」などの感情を表現するときにはひとつ厄介な問題がある。「このコーヒーはおいしい」*Ce café est bon.* のように、外界に存在するモノについて何かを述べる場合は問題ない。モノを *ce café* で指し、それについて何かを述べればよいからである。「おいしい」と判断しているのは話し手だが、コーヒーは話し手の外に独立に存在するモノである。ところが「痛い」や「うれしい」は 私 の外ではなく内に感じられる感覚・感情である。これを難しく言うと「知覚主体」と「知覚対象」が分離されていないということになる。ここから「分かれていないものをどうやって分けて表現するか」という文法上の悩ましい問題が生じる。

主体と対象が分離されていないという事態は、何も感覚・感情表現に限ったことではない。「自分で自分の体に働きかける」ときにも同じことが起きる。こんなときに出番が来るのが代名動詞であることはよくご存じだろう。

- (1) *Je me lave les mains.* 「私は手を洗う」
- (2) *Il se brosse les dents.* 「彼は歯を磨く」

この場合、代名動詞は「洗う側」と「洗われる側」が分離されていないことを文法的に表わしている。この主体と客体の分離に英語はまったく関心がなく、*I wash my hands.* とごくふつうの構文で済ませている。これは *I wash my shoes.* と何ら変わりがない。フランス語では(1)と「私は靴を洗う」*Je lave mes chaussures.* とは異なる構文を使う。ちなみにこのとき英語では「手」には所有形容詞 *my* がついているが、フランス語では定冠詞 *les* であることにも注意しよう。フランス語では人体について「私の手」のように、「全体」と「部分」の関係が成り立つときは、所有形容詞を使わず定冠詞で済ませる。

感情を表わすときに代名動詞がよく使われるのは、上に述べたように代名動詞が「主体と対象が分離されていない」事態を表わすからである。

(3) Je me suis étonné / amusé / réjoui / inquiété / ennuyé.

「私は驚いた / 楽しんだ / 喜んだ / 心配した / 退屈した」

このとき「私」は je - me と二重に表現されているが、それは「私」が感情の渦巻く場であるとともに、その感情を感じる主体でもあるためである。

感覚・感情の原因を分ける

「痛い」という感覚や「悲しい」という感情は私たちの内に生まれるものだが、多くの場合何か原因がある。「なじかは知らねど心憂ひて」ということもあるだろうが、たいていは原因があるものだ。たき火をしたら煙が目にしみたとする。このとき「煙」が感覚の原因である。フランス語は原因を主語に立て、知覚主体である「私」を目的語に置く構文を好む。

(4) La fumée me pique les yeux. 「煙で目がヒリヒリする」

(5) La lumière m'a ébloui. 「光に目がくらんだ」

(6) Votre lettre m'a réjoui. 「あなたの手紙はうれしかった」

(7) Sa démission m'a étonné. 「彼(女)の辞職には驚いた」

このような表現において、フランス語と日本語のしくみは大きくちがう。感覚・感情の原因は日本語では多くは「～に」「～で」という助詞でマークされ、感覚・感情が生まれたきっかけを表わしている。一方フランス語では感覚・感情の原因は主語に置かれて、私に能動的に働きかけるものとして表現される。先月号のこの欄でお話したように、フランス語は「誰かが何かをする」という表現パターンを好む言語である。感覚・感情表現ではこの「誰か」の位置に感覚・感情の原因を置き、それが痛みや悲しみを生み出すという捉え方になっている。ある言語学者によると、フランス語にはこのような構文を取る動詞が300～400はあり、しかも少しずつ増加しているという。だからフランス語ではこのパターンが主流なのである。

一方、日本語の捉え方はまったくちがう。「うれしい」という感情は何かをきっかけとしつつも、自然に私の内に湧き上がるものとして捉えられている。だから「彼の辞職は私を驚かせた」という言い方はバタ臭い翻訳調で、自然な日本語とは感じられない。その昔、チェンバレンという学者は日本語に「彼の辞職は私を驚かせた」流の言い方がないことを、日本語の欠点として嘆いたことがあるが、大きなお世話である。日本語には日本語固有の物事の捉え方というものがある。

(4)～(7)のフランス語と日本語を較べてみてもうひとつ気づくことがある。フランス語では常に表現されている知覚主体の「私」meは、日本語では表現しない方が自然だという点である。もちろん「私は煙で目がヒリヒリする」とか、「彼の辞職に私は驚いた」と言って言えないことはない。しかし、強い感覚・感情を感嘆的に表現するときは、「うれしい!」とか「痛い!」のように、「私」を表現しないこと

からもわかるように、「私」は感覚・感情が湧き上がる「場」なのであって、日本語ではこのような「場」は統語的に表現しない。逆に言うとフランス語ではわざわざ表現してやらないといけない。誰かにくすぐられたり驚いたりしたら次のように言う。どちらの場合もフランス語では「私」 me は欠かせないのである。

- (8) Tu me chatouilles ! 「くすぐったいよ」
(9) Ça m'a étonné. 「驚いたよ」

体の一部だって分ける

上に見た例のように、感覚・感情の原因を他に求めることができるときは、それを主語に立てればいい。ではそうできないときはどうするか。感情の場合は原因がないのは考えにくいだが、感覚の場合にはあり得ることである。なぜか突然背中がかゆくなったとする。このとき、冒頭で問題として出した Le dos me démange. 型の文が活躍することになる。

- (10) Les yeux me cuisent. 「目がヒリヒリする」
(11) La tête me tourne. 「頭がクラクラする」
(12) La langue me brûle. 「舌がヒリヒリする」

このパターンでは、体の一部があたかも切り離すことができるかのように主語に置かれ、その体の一部が感覚主体である「私」に何かをするように表現されている。本来、目は私の体の一部である。ヒリヒリする痛みを感じているのは「私」であり、その痛みは「目」という部位に局在している。「私」と「目」と「痛み」は、本来は私の体という場にひとつになっているのだが、フランス語的発想はこの「全体」から「目」だけを切り離して、私に痛みを感じさせている部分として主語に置く。この発想はなかなか日本語を使う私たちにはなじめない。文法のしくみのちがいを超えて、ものごとの捉え方のちがいに起因しているからである。

悲しみは私にしか感じられない？

感覚・感情表現についてよく言われることだが、日本語には人称制約があり、原則として一人称でしか使うことができない。

- (13) 私は悲しい / うれしい
(14) ??彼は悲しい / うれしい

3人称で使うときには、「彼は悲しそうだ」とか「彼は悲しいのだ」のように、最後に「そうだ」や「のだ」を付けてやらなくてはならない。これはふつう次のように説明されている。感覚や感情はそれを感じている人にしかわからない私的なもので

ある．だから他人について言うときには，「そうだ」を付けて推測であることを示したり，「のだ」を付けて説明モードの文にしてやらなくてはならない．

これにたいしてフランス語ではこのような人称制約は見られないとされている．実際，Je suis triste. と並んで，Il est triste. は不自然な文とは感じられないという．しかしこの問題はもう少し注意深く探る必要があるようだ．なぜなら次の例で(15)の1人称は問題ないが，(16)の3人称はややおかしいとする人がいるからである．

(15) Ce film m'amuse. 「この映画は (私には) おもしろい」

(16) ?Ce film l'amuse. 「この映画は (彼には) おもしろい」

フランス語のパターンは，Paul a battu Marie. 「ポールはマリーをたたいた」のように，ポールとマリーという別々の存在のあいだで何かが行なわれるという事態を基本としている．だから感覚・感情表現のように，「感じている人」と「感じている部位」と「原因」とをはっきり分けられない事態を表現しようとする時，いろいろとやっかいな問題が起きるのである．このように微妙に問題については，言語によって採用した解決法が異なることに注意すべきだろう． (とうごう・ゆうじ)